

滝呂神明神社磁器狛犬 市有形文化財指定記念
多治見市文化財保護センター企画展

滝呂やきものの物語

『先見出藍ス』

平成24年7月30日(月)～12月14日(金)



多治見市有形文化財・滝呂神明神社瑠璃釉磁器狛犬
高さ 阿形 25cm 呷形 24.8cm、弘化4年銘(1847)



多治見市有形文化財
滝呂神明神社無釉磁器狛犬
高さ 18cm、天保14年銘(1843)

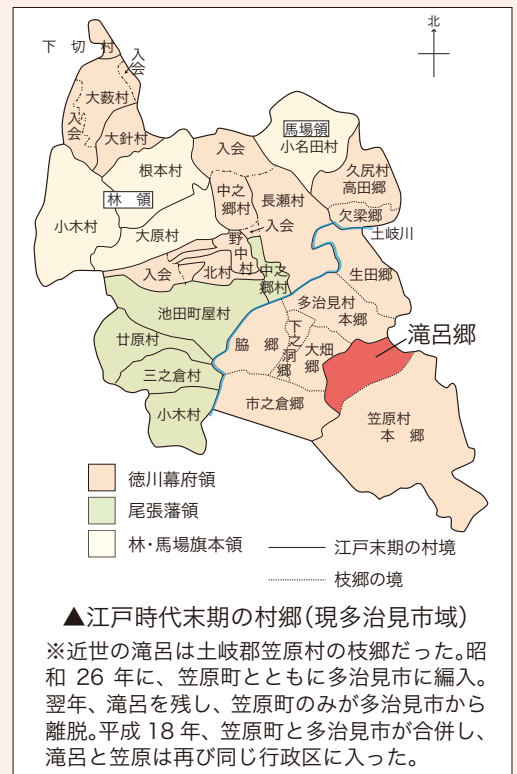
序章

平成24年3月29日、滝呂神明神社磁器狛犬(2種3体)が多治見市有形文化財に指定された。天保14年(1843)銘の1体(阿形は欠損)は無釉、弘化4年(1847)銘の一对は瑠璃釉と白釉を掛け分けて斑文様が表現され、阿形呷形で色調が反転する。陶製狛犬を神社に奉納する習慣は江戸時代の美濃・尾張地方で多くみられたが、そのほとんどは陶土を素材としており、滝呂神明神社磁器狛犬のように磁土を素材としたものは、近世においてはほとんど類例がなく貴重である。本展は狛犬の文化財指定を記念し開催するもので、滝呂⁽¹⁾の窯業史を紐解くことから、滝呂神明神社に磁器狛犬が奉納された背景を探ってみたい。



▲五輪窯祈念碑(滝呂町6丁目) 見出藍は、そのような滝呂窯業の姿勢を表した一言である。

副題の「先見出藍^{しゅつらん}」は、滝呂窯業中興の祖・松原領衛、柴田善八、柴田鶴助を顕彰し明治34年(1901)に建立された「五輪窯祈念碑^{ごりんがま}」に刻まれた言葉である。「出藍」の本来の意味「弟子が師より秀でること」から転じて、ここでは先達の先見の明を讃える意味で使われている。滝呂は、近世におけるいち早い磁器生産への転換、近代における石炭窯や機械ロクロの導入、輸出用洋食器の生産と、美濃窯の中でも常に先進の技術を取り入れ、新しい方向性を志してきた地域といえる。祈念碑に刻まれた「先





第1章 滝呂窯業の始まり

言い伝えでは、慶長(1596～1615)末年に瀬戸赤津から滝呂へ移り住んだ松原領右衛門が開窯したとされる(岐阜県 1916)が、実際には、窯跡の存在から、滝呂の窯業は中世の山^{やまぢやわん}茶碗生産に始まったことが分かる。つづく大^{おおがま}窯(単室半地上式の窯)の滝呂日影^{ひかげ}1号窯(16世紀)は、平成3年(1991)に発掘調査が行われ、緑釉天目茶碗などが生産されたことが明らかになった。これまで山茶碗窯は2基、大窯は1基確認されているのみで、滝呂が本格的な窯業地となったのは近世の連房式登り窯以降といえるだろう。滝呂の連房式登り窯跡は、近世9基、近世末～近代11基存在したことが分かっているが、これまで発掘調査が行われた事例はなく、また、早くから進んだ開発によって窯跡が破壊されたため、不明な部分が多いのが現状である。



写真上：滝呂向島窯跡出土の山茶碗・碗皿(13世紀)

写真下：滝呂日影1号窯跡出土の緑釉天目茶碗(16世紀)

第2章 近世の滝呂 - 徳利生産と親荷物と -

近世の滝呂については、窯跡周辺の採集品から窯業生産の様相を垣間みることができる。滝呂東1・2号窯跡(滝呂町13丁目)の採集品には、碗類、小杯、片口鉢、灯明皿、徳利、^{せつき}炆器染付皿・碗、磁器染付碗、窯道具などがみられ、時期は18世紀前半～19世紀後半(美濃窯連房式編年Ⅲb～Vb期)に比定される。滝呂東窯では、18世紀前半～19世紀初頭には多種類の陶器がみられるが、磁器生産が始まる19世紀前半には、陶器は灰釉徳利が主体となり、他の器種は減少していく。また、滝呂東山1・2号窯跡の遺物とみ^{かんどんわん}られる採集品⁽²⁾においても、19世紀中頃(連房Va期)の広東碗や皿などの染付磁器・炆器とともに、同時期の灰釉徳利が相当量含まれる一方で、灰釉徳利以外の陶器はほとんど含まれない。採集品という限られた資料からの推測ではあるが、滝呂では、生産の中心が磁器へと移行する19世紀中頃、陶器については灰釉徳利に種類を限定して生産を行ったと考えられる。



▲滝呂東窯跡採集品(18世紀前半～19世紀後半)

「親荷物」の取り決めと徳利生産 江戸時代、その土地の特産品で、他所では生産できないやきものを「親荷物」と呼んでいた。親荷物は、同じ製品の競合による価格下落を防ぐ目的で取り決められたと考えられている。美濃窯では、寛政12年(1800)に、土岐郡笠原村、同村滝呂郷、多治見村、同村大畑郷、同村市之倉郷、久尻村高田郷の6郷において親荷物を取り決めている。このとき、滝呂郷を含めた5郷は「白錫」(灰釉徳利)と「あめ徳利」(鉛釉徳利)、市之倉郷は「鍍徳利」(鍍釉徳利)を親荷物と定めている(多治見市 1976 : No.11)。高田神社窯、滝呂



鍍徳利(18世紀後半)



▲滝呂東窯跡採集の徳利
鉛釉徳利(18世紀後半)
(胴下半部欠損)



灰釉徳利(19世紀中頃)

東窯、市之倉中2号窯、各窯出土の徳利の比較から、滝呂と市之倉は親荷物の取り決めを遵守し、19世紀初頭に親荷物以外の徳利の生産を停止しているが、高田ではそれが守られていないという傾向が指摘されている(山内 2006)。

滝呂は、徳利に関しては親荷物の取り決めを遵守したとみられるが、その他の製品で違

反をしたとみられる文献が残されている。文化2年(1805)に、^{おろし}下石村(現土岐市)が笠松役所に届け出た文書によると、下石村の親荷物である「小茶碗」を滝呂で焼いているので、焼かぬようにと申し出たところ、滝呂側は「小茶碗」ではなく「酢皿」を焼いていると言うが、下石村の「小茶碗」と寸分違わぬものである。今後、滝呂が「小茶碗」と同形のものを焼くことを差し止めてほしいと願い出ている(多治見市 1976 :No.12)。

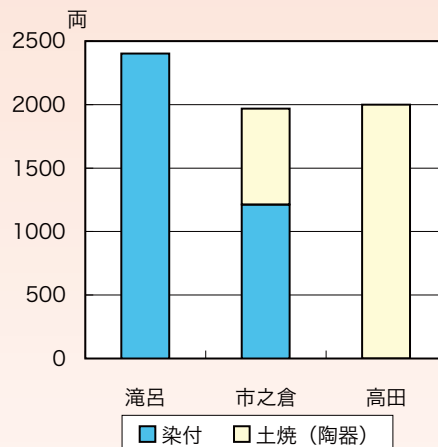
第3章 磁器生産と御用焼

19世紀初頭に瀬戸窯(愛知県瀬戸市)で始まった磁器生産の技術は、美濃窯へは瀬戸と隣接する市之倉へまず伝わったともいわれる(一瀬 1966)。磁器の商品価値の高さから、その製法はすぐに美濃窯一帯に広まる。天保8年(1837)には、土岐郡5ヶ村の生産額3500両のうち、新製焼(磁器・炆器)が2000両と陶器の生産額を上回っている(多治見市 1976 :No.77)。

美濃窯の中でも、とくに滝呂は磁器生産への移行が早かったとみられる。天保13年(1842)の滝呂の生産額は染付(磁器・炆器)2402両であるのに対し、市之倉は生産額1970両(原文のまま)のうち染付1212両2分、土製(陶器)757両2分と記され、文献上では、滝呂は磁器生産の先進地である市之倉の生産額を凌駕し、さらには、陶器から染付(磁器・炆器)へと完全に生産転換しているようにもみえる(棒グラフ参照)。窯跡の採集品には19世紀中頃の灰釉徳利が含まれることから、実態としては染付に完全移行したとはいえないが、少なくとも滝呂は市之倉など他の地区に比べ、染付(磁器・炆器)への転換が早かったといえるだろう。窯跡の遺物からも、丁寧に仕上げられ、硬質に焼き上げられた質の高い磁器製品を生産していたことがみてとれる。

滝呂神明神社に、磁器狛犬(天保14年銘、弘化4年銘)が奉納されるのは、ちょうどこの時期であり、磁器狛犬の奉納からは、美濃窯の他の地域に対し磁器生産の技術を誇った滝呂の自負のようなものを読み取ることができる。

御用焼生産 武家や公家などの注文に応じて行う陶磁器生産を「御用焼」といい、美濃窯では滝呂、市之倉、妻木(現土岐市)で御用焼を焼いた記録が残る。滝呂では寛政5年(1793)に加藤定吉が水指を京都の聖護院に納め、「滝呂焼」の銘を賜ったという(多治見市 1976 :No.257)。文久2年(1862)、滝呂窯業の再興をはかり松原領衛らが五輪窯を築いたとされるが、ちょうどこの頃、1度途絶えていた聖護院への御用焼納入が再開したとみられる。文久4年(1864)、不納になっていた奈良茶碗700人前について、半分の350人前を70人前ずつ5年間で納めることを取り決めている(多治見市 1976 :No.259)。聖護院へ納めた奈良茶碗がどのようなものであったか定かではないが、御用焼を納める際に荷に付ける木札や、聖護院の運営を担った住心院とやり取りした文書など、多くの文字資料が残されており、聖護院への御用焼納入が行われていたことは間違いなさだろう。



▲天保13年(1842)の陶磁器生産額
(多治見市 1976 :No.78 をもとに作成)



▲滝呂東山1・2号窯跡付近採集 19世紀中頃
磁器染付広東碗



炆器染付皿



▲御用焼の荷札
「住心院殿用物」
多治見市図書館郷土資料室蔵





第4章 近代—松原栄助と小皿生産と—



▲松原栄助（5代目） 年（1868）、明治7年（1874）の「焼物仕切帳」が残されている。

幕末～明治10年代に滝呂で活躍した人物に、松原栄助（5代目）（1835～1883）がいる。明治時代の滝呂では、松原栄助など数名によって輸出を意図した美術陶磁器が生産され、第1回内国勧業博覧会（明治10年/1877）へも出品している。

一方で栄助は、職人を雇用して国内向けの日用品も生産していた。松原家文書（郷土資料室蔵）には、慶応2年（1866）、同4



▲松原栄助作 染付花瓶
明治時代前半

ここには製造品種や取引先などが記載され、栄助の窯の経営実態がみえてくる。製造品種は皿類、碗類、湯呑、猪口などが記され、幕末～明治初頭には様々な品種を製造していたことが分かる。取引先は、多治見の西浦本店のほか、大垣、岐阜、笠松、名古屋、東京などの地域がみられる。

近代の美濃窯は、量産品については地域ごとに生産品種を分ける分業を行うようになる。市之倉の盃、笠原の飯茶碗などだが、滝呂は小皿に特化した生産を行った。とくに明治20年（1887）代の濃尾大震災や銅版転写の導入を契機とし、分業化や多治見の陶器商との強固な関係が促進されるとみられる。松原家文書から、明治初頭には多品種を生産し、多治見の陶器商以外の遠隔地とも直接取引を行っていることがわかる。一方で、窯跡の採集品からは、銅版転写が導入される明治時代中頃から大正時代にかけて、製造品種が小皿に限定されていく様子がみえてくるのである。



▲滝呂の特産品の磁器小皿
滝呂稲荷窯跡付近採集（明治～大正時代）

終章 洋食器の街へ



▲染付銅版梅文皿（ケーキ皿）
大正時代頃

明治33年（1900）、国内向けが不況に陥ったことから、滝呂は輸出向けの洋食器生産へと転換をはかる（加納 1958）。多治見町で初めて石炭窯が導入された翌年の明治43年（1910）には、滝呂でも最初の石炭窯が築造される。石炭窯が洋食器の白素地焼成に適していたこともあり、滝呂は美濃窯の中で石炭窯が最も早く普及した地域である（多治見市 1987）。大正13年（1924）の『窯業銘鑑』に掲載された土岐郡の輸出向

製造業 14 軒のうち半数の7軒が滝呂の業者であり、この頃、滝呂が洋食器生産の中心地となっていたことが分かる。昭和20年（1945）代には、滝呂地区の生産高の9割を洋食器が占めるようになり、昭和30～40年代に最盛期を迎え、コーヒー碗皿などの白素地が名古屋の貿易商へと大量に出荷された。

（春日美海）



▲白磁コーヒー碗（白素地）
昭和30年代

註（1）古文書などでは「瀧呂」と表記されるものもあるが、本稿では「滝呂」に統一する。
註（2）製陶所の建て替え工事の際に一括して採集されたもの。

〈参考文献〉

- 一瀬 武 1966 『美濃焼の歴史』
- 加納陽治 1958 『多治見風土記』
- 岐阜県 1916 『岐阜県産業史』
- 多治見市 1976/1981/1987 『多治見市史』 窯業史料編 / 通史編上 / 通史編下
- 多治見市教育委員会 1993 『美濃窯の焼物』
- 多治見市教育委員会 2003 『多治見市所在漢文による碑文集』
- 多治見市図書館 2007 『松原家文書目録』
- 松原太蔵 1961 『滝呂区誌』 多治見市滝呂区
- 山内伸浩 2006 「市之倉中窯・洞窯における徳利生産について」『市之倉中2号窯・洞窯発掘調査報告書』 多治見市教育委員会

〈謝辞〉（順不同・敬称略） 滝呂29区、滝呂地区の皆様、滝呂神明神社、陶苑しばらく陶磁資料館、丸半製陶所、多治見市図書館郷土資料室

多治見市文化財保護センター企画展

滝呂やきもの物語 『先見出藍ス』

展示期間：平成24年7月30日（月）～12月14日（金）

開館時間：午前9時～午後5時

休館日：土・日・祝日 入館無料

発行 多治見市教育委員会・文化財保護センター

〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘 10-6-26

電話 (0572)25-8633 FAX (0572)24-5033

URL <http://www.city.tajimi.gifu.jp/bunkazai/>